

自信を持って、学習や遊びに取り組む子をめざして

岡 村 清

はじめに

小学部3年に転入したT男は、発達性失語症の傾向があり、構音に障害を持ち口数が少なく自信のなさが目立った。偏食が原因で肺炎になり入院した以外でも学校を休みがちの児童であった。それが昨年度までに、嬉々として先生や友達に話しかけたり活動したりするようになった。また6年生の現在、あれほどいやがっていた構音指導を素直に受けている姿を眺めながら「言語指導」というのは「コミュニケーション指導」ひいては「生きる力の指導」なのだという思いを述べたい。

1 プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和57年9月23日生 12歳2か月 小学部6年 男子
- ・初語 3歳「マンマ」 あまり声を出さず、おとなしい幼児期であった
- ・3年生で本校転入 全般性発作徐波・左側後頭葉を中心とした棘徐波結合の脳波が認められる

(2) 諸検査による実態

- ・右図の津守式発達検査でみると、
言語の落ち込みがある。

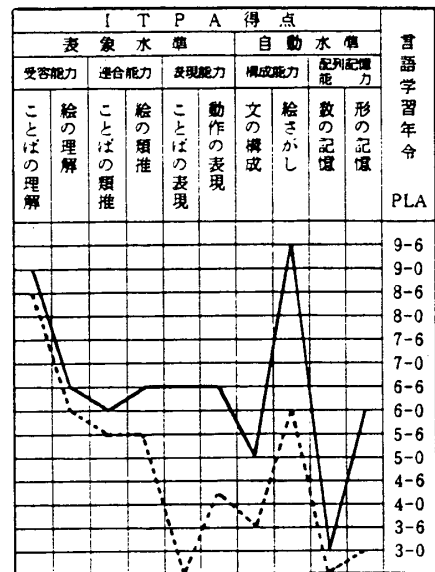
運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語
5:0	7歳以上	6:6	7歳以上	4:4

(H6.4月実施)

(3) コミュニケーションに関する実態

- ・顔面麻痺があり、口腔の動きがぎこちない。誤った音を覚えてしまっているが、構音の誤りは一定していないことがある。まともな文字は、意味的に理解できるものも多いが、ひらがなと音の結びつきはなかなか理解できない。
- ・身近な人と会話がしたくて、図示やジェスチャー、言い替え言い直しをしてなんとか会話を成立させようとする。
- ・ITPA言語学習能力診断検査は右表のようである。形の記憶、数の記憶が特に落ち込み、ことばの表現、文の構成に落ち込みが見られるが今年度伸びの見られた部分でもある。

----- 3年生10月 — 6年生12月



ITPA言語学習能力診断検査

(4) 行動特性

- ・視覚的な情報や造形的活動を好む。
- ・人の役に立つ活動をして喜びを感じることができる。
- ・背筋力の弱さもあって姿勢保持が苦手である。身の回りの処理をおおざっぱにやってしまう。

2 取り組みの構想

個人目標 自信を持って学習や遊びに取り組む子

つきたい力 ・粘り強く、いねいに取り組む力 ・基本的な会話や読み書きの力
・時間、場所、目的に応じた活動をする力

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

仮説 本児は、不登校の経験を持っている。そのような状態に陥ったきっかけは、病気入院もさることながら、不得意なことを繰り返した失敗体験の積み重ねによる意欲の喪失状態をおこしたからではと考えた。そこで本児の得意なことを教師がともにやり、楽しさの共有をしたいと考えた。活動そのものの楽しさやコミュニケーションできたという喜びが活動全般の意欲につながる。そして活動が活発になると大きな声が出せ、恥ずかしがらなくなる。さらに自分に自信ができれば始めると不得意なことにも挑戦し始め、話題や内容がさらに広がったり、人の役に立つ喜びを感じたりするようになる。また発音の明瞭化が活動上役に立ち、それが必要だと彼自身感じ、構音指導に積極的に取り組むようになることを考えた。

めざすコミュニケーション像 少しでも相手にわかりやすく伝えようとする子

つきたい力 ・使えることばの拡大 ・大きな口を開けて発声する習慣
・言い換える力（ことば、身振り、絵） ・正しい構音

指導方針

- ・できるだけ本児の思いを大切に、興味関心のあることを手がかりに会話を広げていったり、生活経験を豊かにしていったりする。
- ・心理的負担にならない程度に個別に構音指導する。
- ・生活の中で機会をとらえて発声練習・口型指導をする。
- ・机上の学習に取り組めるように、達成容易な内容や自尊心をくすぐるような内容（漢字、アルファベット等、また、ひらがなはまとまりとして）を多くした教材を準備する。
- ・担任以外の先生の協力も得て、低学年の児童の相手をしたり世話したりする場面や、他学部の先生や生徒と関わる場面（特に児童生徒会活動）を増やす。
- ・自分の行動が相手にどのような効果を及ぼしているのか考える機会を与える。

3 指導の実際

コミュニケーション意欲を高めたり、自分づくりをしたりした実践

①生活単元学習

宿泊学習では、指示されてではなく、自分で段取りを考えて自発的に活動させたいと考えた。この単元は繰り返し実施しているため見通しを持って活動できた。わからない点は、どんどん質問する姿が見られた。たなばた発表会では、6年生らしく王様の役を希望した。照れ隠しのためかバリトン歌手のような太い声で歌ったが、それが大きな声につながった。せりふの声はまだ小さかった。学習発表会では、自信を持って大きな声でせりふを言うことをねらった。それまでの自信の積み上げがあったためや、劇の指導者が練習ごとにほめ、はげましたため、ねらい通りの結果が得られた。

その他合同学習があるたびに、学部として意図的に役割を与えられ、さらに自信を深めていった。

②遊びの時間

お店やさんごっこでは、たとえ失敗しても遊びであるから教師はしからなくてすみ、本人ものびのび活動できると考えた。得意な製作面をクラスで受け持ったこともあり、どんどん準備し、製作していった。そして合同の遊びの時間では、自分で遊ぶ楽しさとともに、製作した道具を使ってもらい喜びも体験できた。

③休憩時間

パソコンを余暇利用として、自由に使うことを許した。ワープロ、図形ソフトの操作、学習ソフト、ゲーム等、うまく出来たことを見せようとしたり、操作の質問してきたりした。特に、学研「FDデータ」から学習用フロッピーを作成する際には、解説の図や文とにらめっこで操作し、パソコン操作に必要な基礎的な用語や文字を覚えることができた。無料のパソコンソフトが欲しくて、はがきを自分で書いて出したこともあった。サッカーを担任や、同じような力を持ったO男としばしばやっていた。たまたま遊びに来ていた他校生とサッカーをする機会が持て、それまでよりも楽しめた。この際、隣のクラスの教師と一緒に遊んでやると声をかけてくれたことがきっかけとなった。また、他クラスとの関係では、T男にしきりに寄ってくる1年生に対し、遊び相手になった。このクラスの担任が遊び相手になってくれるようT男に声をかけた。捕虫網を持って遊んでいた1年生のクラスに入り、とんぼになって逃げ回り、遊び相手をした。さらには、苦手なことにも挑戦してできたという成功体験をもっと積みせたいと考えていたとき、家庭から自転車に乗れるよう指導して欲しいという要請があった。個別指導しようとしたがいやがった。この場合は「乗れるようになれば楽しく便利だろうな」という話をして指導はやめた。3



パソコンに熱中



自転車に乗れたぞ

カ月ほどたってからクラス学習として自転車や三輪車に乗る学習を設定したところ、練習に挑戦し始め自転車に乗れるようになった。

コミュニケーション技能を高めていった実践

① 意図を伝達しやすくするための指導場面

相手が理解できていないと感じたら、自分から言い替え、言い直しをするようになった。また、ジェスチャーを使ったり、紙や黒板に絵や図を書いて説明もした。

② 文字指導

文字の読み書きについては、自尊心を保てるよう、ひらがなの読みよりも、漢字の読み書きの方に重点を置き、興味を持った。まとまりとして覚え、読み方は違っても意味のあう漢字が増えつつある。

時刻や時間の指導は、生活に利用できることをねらった。授業や活動の開始・終了時間を告げておきそれを守る努力をした。時計が読めるようになったり、時計に従って言われなくても行動したりした。また、数字も正しく読めることが多くなった。

③ 発声、構音指導

集団学習の中よりも個別に指導した方がさらに効率的であると考え、発声指導を行った。また、舌を動かす練習、長く息をはく練習、母音・子音の構音練習を行った。自分から積極的に記録用ビデオカメラを設置し、発語指導を受ける姿が見られるようになった。

明瞭な発音は、右図のように増えてきた。

あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ	か	き	く	け	こ
✕	✕	✕	✕	✕	✕	△	✕	✕	✕
ち	ち	ち	ち	△	✕	ち	✕	✕	△
な	に	ぬ	ね	△	△	に	ぬ	ね	△
✕	✕	✕	へ	ほ	は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	✕	む	め	も	ま	み	む	め	も
や	ゆ	よ			や	ゆ	よ		
ね		△			△				△

H 5 語 頭 H 6 単 音

五十音表による発音の変化

4 考察と今後の課題

単元として毎年繰り返される学習は、どう行動・発言すればいいのか見通しが持ちやすかった。したがって自発的な行動の結果としての成功体験をさらに積み重ねることができた。また、最上級生として、なおかつプレッシャーとならないような「できる」仕事を数多く与えられるようになった。このことで「頼りになる」という評価が得られ、自信を深めていったと考える。小さな子どもの面倒をみること、人に頼られることで、自分は役に立つ人間だという自分づくりがなされたのではないか。家が工場を始め、本児も手伝い役に立っているという家庭での自分の位置づけにもよかったのではと思う。自己客観視ができ始める段階にさしかかり、「望ましい自分」について考えることができ始めたのではと考える。構音指導については、一音ずつの音の明瞭さは、増してきている。しかし、日常場面での発音は、慣れた教師でもなかなかわかりにくい状態である。また、読める漢字は増えてきたが読み書きできるひらがなはあまり増えていない。しかし、ここまでくれば、今後も人との関わりを求めて力強く活動していくことであろう。